



安城市議会議員 石川つばさ通信 号外 市政レポート

臨時議会開催 議会人事固まる

5月13日、臨時議会が行われ、議会人事が固まりました。私は学校や防災、市民協働などを所管する市民文教常任委員会に決まりました。人事の詳細は以下の通りです（敬称略）。

議長 二村 守
副議長 杉山 朗
監査 辻山 秀文

総務企画 常任委員会	福祉環境 常任委員会	市民文教 常任委員会	産業建設 常任委員会	議会運営 委員会
◎深津 修 ○近藤 之雄 杵名 喜代治 法福 洋子 白山 松美 野場 慶徳	◎永田 敦史 ○石川 博英 塚原 信一 森下 祥子 守口 晶治 杉山 朗 大屋 明仁	◎石川 博雄 ○松尾 学樹 神谷 和明 白谷 隆子 宗 文代 石川 翼 辻山 秀文	◎今原 康德 ○鈴木 浩 石川 郁子 寺沢 正嗣 稲垣 退三 松本 佳栄 神谷 清隆	◎野場 慶徳 ○大屋 明仁 宗 文代 鈴木 浩 白山 松美 辻山 秀文 松尾 学樹 近藤 之雄

※ ◎は委員長、○は副委員長

なお、本年度より常任委員会の所管に一部変更が生じました。「経済福祉常任委員会」は「福祉環境常任委員会」へ、「建設常任委員会」は「産業建設常任委員会」へそれぞれ名称が変わり、旧経済福祉常任委員会の所管であった商工課や農務課に関する事業については産業建設常任委員会に移管されました。

石川翼事務所 446-0072 安城市住吉町荒曾根 1-245 アワーズビル 2F 南
電話 0566-98-6932 メール ishikawa2011@aria.ocn.ne.jp
編集：石川つばさを支援する会

革新勢力の再興へ

我々に足らざるものは何か②

前回、革新勢力の停滞について、内外3つの要因をあげました。今回はそれらを順に見ていきます。

まず、「①旧東側諸国崩壊で革新陣営への信頼が崩れた」点についてです。前回、自分たちの目指す社会像をハッキリさせることの重要性に言及しました。目の前の議案に対する賛否は、その人が目指そうとする社会像に左右されます。自身の目指す社会像に逆行する議案に対しては反対するのが当然ですが、何を目指しているかがハッキリさせないまま反対すると「何でも反対」とみなされがちです。経済を軸に考えた時、革新陣営の目指す方向は、より、市場原理に依拠しない経済体制です。その中には、共産主義を目指す人もいれば、市場メカニズムを一定認めつつも市場任せにせず、積極的に政府が介入するケインズ主義や社会民主主義を目指す人もいます。この辺りの細かな言葉の定義は様々な意見がありますので深入りしませんが、濃淡はあれど、革新陣営と括られる人たちは資本主義市場経済には問題があると捉えているのではないのでしょうか。少なくとも、冷戦や55年体制をリアルタイムで経験してきた年代ではそうした受け止め方をしている人が多いように感じられます。

今から30年程前に、ベルリンの壁が崩れ、ソ連も崩壊しました。地球上の1/3を占めた東側諸国の崩壊は、西側の革新陣営にも少なからず影響を与えました。日本で言えば、社会党の退潮は東側諸国の崩壊とほぼ同じ時期に起きています。もちろん、支持母体であった総評の解体や、少し後の小選挙区制導入など国内的要素もあれど、西欧でも同様の傾向が見られるため、やはり旧東側諸国の崩壊が西側の革新陣営に及ぼした影響は無視できない規模のものであったことが分かります。問題は、「革新系の人たちに任せると日本もソ連や東欧みたいになってしまう、国が崩壊する」という負のイメージを、当の革新陣営自身が未だ払拭し切れていない点です。対極にある新自由主義の弊害を不安定雇用や労働条件の悪化と言う形で多くの国民が実体験している中であって、それでも

なお、革新陣営がその支持を引き戻せていない点は極めて大きな問題と言わざるを得ません。端的に言えば、失敗した旧東側諸国のどこが問題で、どの様にしていれば良かったのかという総括が十分なされていない事が根本にあるように感じます。そうした教訓をもとに、現状の新自由主義にかわる新たな社会主義なり、共産主義なり、ケインズ主義・社会民主主義なりを提示しなければ、「革新系に任せる＝ソ連などの旧東側諸国のようになる」という図式を崩すことはできません。

例えば私の所属する新社会党は、「新しい社会主義社会」を目指すと綱領に謳っています。旧東側の崩壊を念頭に、「人類が実践した様々な社会主義の試みの成果からも、また失敗からも学び(中略)、人間的で民主的な新しい社会主義」を目指すとしています。しかし、内側から見ても具体策が十分に示されているとは言えません。理念には大いに共鳴するものの、それが具体的な政策とはなっていないのです。これは自党に対する批判ではなく、党员である自分自身を含めた反省です。

旧東側諸国は、初めからうまくいかなかったわけではありません。例えば朝鮮半島に目を向けると、戦争からの復興は北側の朝鮮民主主義人民共和国でより早く進み、南側の大韓民国は「漢江の奇跡」と呼ばれる経済発展を迎えるまで立ち遅れていたとされています。朝鮮半島と同じく分断を経験したドイツでは、経済基盤の弱い地域を領域とした東側が西側の後塵を拝しはしたものの、「社会主義の優等生」と評されるなど、ある時点までは経済の発展が見られました。

ではなぜ、最終的に社会主義経済は立ち行かなくなっただけなのでしょうか。資本主義の様に延々と経済成長し続ける必要などなく、国民生活が担保され、大きな不満を国民に抱かせることが無ければこの様な結果にはならなかったはずですが、崩壊という結果からすれば、国民生活を担保することができず、大いなる不満を抱かせていたことになるわけですが、次回、この点を考察していきたいと思えます。(つづく)